
冒険者かく語りき ～トレジャーハンター修行中～

小坂みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者かく語りき 〜トレジャーハンター修行中〜

【Nコード】

N8943Y

【作者名】

小坂みかん

【あらすじ】

玉藻&土鍋ご飯さんのWizardry Onlineのリプレイ小説「冒険者かく語りき」の外伝です。

キャラ設定の部分等で創作しているところはもちろんありますが、今のところ、小嘶含めほぼ完全リプレイです。

キャラクター間での会話内容や挙動については、あまり創作しておりません！

つまるところ、物語仕立てのプレイ日記でございます。

それなのに、それとなくドラマが見え隠れする不思議。

想像というスパイスをふんだんにふりかけまくらなくても意外とオイシくなるのは、MMOの醍醐味ってやつなんでしょうね。

あ、完全創作する際は前書きのところに「創作です」と書きますね！

土鍋ご飯さんと同居している私。

PCが一台しかないため、私のハル君と土鍋ご飯さんのミューちゃんやイナナさんが一緒に冒険するのはいつになることやら…。

Wizardry Onlineはgame potさんの提供する基本プレイ料金無料のMMOです。

この作品はpixivでもお読み頂けます。

用語辞典 **(最終更新日：2011/11/28)** **(前書き)**

このゲームをプレイしたことがない人のための用語辞典です。

リプレイ小説化するにあたってゲーム内の表記等と変えているものもあつたり、私の独自の解釈のものもあるので「これが全て正解」ではないです。

もちろん、読み飛ばしOKですし、本編の方でも説明を入れさせて頂いていますので「そんなの必要ねえよ!」という方は「回れ右」して2話目よりお楽しみください。

【レベルについて】

冒険者には2つのレベルがある。

・冒険者レベル

肉体の成長度合いを表す。レベルが上がるとHPとMPが増える。力強さや素早さ、運などのパラメータは確実に上がるというわけではなく、上がらない事もあれば逆に下がるということもある。

・ソウルランク

魂の成長度合いを表す。ランクがあがると冒険者レベルの上限が解放されたり、挑戦可能なダンジョンが増えたり、更には装備出来るものの種類が増えたり装備品を強化したり出来るようになる。

【冒険者証】

冒険者レベルやソウルランク、あとの程度でレベルが上がるかなどの指標だけでなく、冒険者個人の属性や、冒険を通して獲得した称号、現在の自分の装備についてや「どんなものに自分は耐性を持っているか」なども確認出来てしまう優れ物。なんと、体調管理も行えるぞ！

【称号】

一定レベル何かをすると授けられるもの。冒険者としてのステータスの一部。種類は色々あるらしい。

アライメント

【属性】

何かしらの職業に就くにあたって必要となってくる「個人の人柄を表したもの」的なもの。3種類ある。

・秩序（Lawful）

簡単に言うと「真性の良い人」。ただし、自分の正義を貫くタイプなので、必ずしも善人ではない。

・中立（Neutral）

物事には白黒だけではなく灰色もあるという事を分かっている人。悪く言うところどっちつかず」。ごくごく普通の人。

・混沌（Chaos）

良くも悪くも個性的。単なる腹黒のドジっ子から真性の悪まで幅広い。でも、だからといって必ずしも悪人というわけではない。

【スキルツリー】

職業別に覚えられる技を系統立ててまとめたもの。ギルドから支給されている。冒険者レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、このスキルツリーを見ながら「何を覚えようかなあ」と悩むのも冒険者の楽しみのひとつ。ちなみにポイントを取っておいて後で使うということも出来るので、覚えたい技が覚えられるようになるレベルになるまでポイントを貯めておくのもあり。

【種族について】

・エルフ

耳が長く、美男美女が多い。ナルシストでプライドも高い。体力は低い。向いている職業は魔法系や芸術系。

・ノーム

おっとりとした口調で信仰心も高い。力強さもそれなり。小柄。角が生えてて、耳が少しばかり尖り気味。角はやぎ角みたいな感じで、個体差がある。ちなみに、角を引っ掻かれると死ぬらしく、大昔に人間に乱獲されたそうです…。

【職業について】

ファイター ・戦士

戦いの最前線に出て、剣や斧、槍などで戦う人。

・盗賊^{シーフ}

罠を解除したり、お宝の匂いを嗅ぎつけたり。必ずしも犯罪者というわけではなく、トレジャーハンター的な意味合いの人が多い。

・僧侶^{プリースト}

支援や回復系の魔法が得意。…と、思いきや、戦士の次にブロッカーとして活躍する頑張り屋さんな職業。

【その他】

・ギルド

冒険者にお仕事（依頼・ミッション）を与えてくれる、ありがたいところ。たまに試供品なんかもくれる。

・パーティー

ダンジョンやミッションを効率よく攻略するために冒険者同士が一時的に仲間になった状態。

・ユニオン

パーティー活動などを通して気が合った仲間が集まって作った集団。同盟とか、労組みたいなもの。ユニオンに所属していると、今後何かいいことがあるかも…？

冒険開始から、初めての畏解除成功まで（前書き）

本日（2011/11/26）、初めて畏解除に成功致しました。
あまりの嬉しさを記念して、土鍋ご飯さんに倣ってリプレイを書いてみました。キャラクター設定の部分はもちろん創作ですが、プレイ中の心情はほとんど素です。

冒険開始から、初めての罨解除成功まで

「男エルフで盗賊？何か、やつらしい！宝箱なんかはクールに軽々罨解除しちゃって、女の子には『君の瞳は宝石のように美しい』とか言っちゃって、お宝も女の子も選り取り見取りってわけ？」

「はん。馬鹿馬鹿しい。女なんかよりも、本物の宝石の方が百万倍も美しいね。俺はね、俺のようにうつつくしい宝石様にお目にかかりたいだけなの」

「うわ、出た。ナルシスト発言。あんた、そんなんじゃあ、いつまで経っても独り身よ？」

「うるせえな、放つとけよ」

ハルはかつて姉貴分とした、そんな会話を思い出しながらガツクリと肩を落とし、深いため息を吐いた。そして背中にかかる虫を払いのけながら急いで立ち上がると、安全な場所へと移動しながら荷物を漁り、回復薬を煽るように飲み干した。

「ああ、くそ！また毒針食らっちゃったよ！ム力つくな！！」

思いがけずそう叫び、いまだ追ってくる虫へ八つ当たりのように薬瓶を投げつけると、彼は街へと戻るための梯子めがけて走り出したのだった。

街に戻つてくると、ハルは荷物の中を覗き込み、顔をしかめさせた。戦利品は僅かな回復薬と石と、雀の涙ほどの端金。あとは装備が出来るかどうか分からない靴がいくつかと杖だ。どうせ靴は自分の職業では装備出来ないもののはずだし、石はキラキラと綺麗に光り輝いてはいたが、所詮はただの石である。宝石にはほど遠い。この石を大量に集めると宝箱の鍵を作つて貰えるなどという噂も聞きはしたし、実際にそれらしい宝箱も目にしたのだが、自分の財布の中身を考えると銭に変えてしまった方が良さそうだった。彼は「…靴と一緒に、石も売っちゃおう」と心の中でごちると、杖に目をやった。宝箱の罨解除に失敗して毒を受けつつも、何とか手にした杖だ。良いものであつて欲しい。ただ、この前石つぶてを食らいながら手にした杖は、ささくれだつてボロボロに朽ち果てた二束三文にもなるかどうかのものだった。今日手に入れた杖も同じように汚らしい。…いつまで見つめていても、金にはなってくれない。今度こそ、良いものでありますようにという思いを胸に、彼は道具屋へと歩き出した。

「ああ！やつぱり今回もショボかった！こんなんじゃない、いつまで経つても装備整えらんねえよ！！」

道具屋で靴と杖を鑑定してもらったのだが、やはり自分が装備出来ない靴と、この前と同じ杖だった。道具屋で売っている武器や装

備は、いまだに宿にすら泊った事がなければ酒場を利用した事も無い自分には到底出せない価格だった。以前、姉貴分が「露店販売を覗いてみなさいよ。結構安くていいものがあることがあるわよ」を言っていたが、この街に集まってきている冒険者は、もうかなりの手練となっているのか、露店にも彼のレベルで装備出来るようなものは売っていない。「このままじゃあ、本当にいつまで経っても装備が整えられないから、もっと経験値も金も稼げる依頼を受けようにも受けられないし、レベルも上げられない」と彼がうなだれていると、タイミング良く郵便が届いた。姉貴分からの小包だった。

戦士をやっている姉貴分は良い仲間と巡り会ったようで、仲間達と着々と冒険者レベルを上げていた。そのため、どんどんと低レベルの装備が要らなくなるようで、姉貴分は装備が要らなくなる度に彼に合うサイズに手直しをして送りつけて来た。たまに「最初のダンジョンで盗賊が装備出来るモノ、ゲットするの大変でしょう?」と言って、わざわざ露店をチェックして見つけて来てくれもする。姉貴分に頼りきりなのは情けないと思いつつも、正直大変ありがたかった。ハルは装備中の「毒を受けにくくなる」という小汚い皮鎧を脱いで届いたばかりのローブを着込むと、再びダンジョンへと潜ったのだった。

姉貴分からのありがたい施しのおかげで防御力も上がり、ギルドから討伐を依頼されている盗賊団の下っ端も何とか苦勞することなく倒せるようになってきた。倒した敵の持ち物を物色してみると、

鎧を手に入れることが出来た。街に戻り鑑定をしてもらってみると、以前姉貴分からお下がりで貰ったものと同じ「毒を受けにくくなる」という皮鎧だった。既に持っている物ではあったが、自分で手に入れたということが何とも感慨深かった。

不用品を売り払った金が貯まり、ようやく剣だけではあるがギルドから配給される初級冒険者用の剣から卒業することが出来た。これで攻撃力も少しは上がる。ハルは心なしか顔をほころばせると、再びダンジョンへと戻っていった。

もう少し虫退治で経験値を稼ごうと思っていたにも関わらず、ダンジョンの入口付近でお目当ての虫に出会う事は滅多になかった。もう少し、奥に行きたい。そう思っていた矢先に姉貴分からまたもや小包が届いた。結構見た目の良い皮鎧と、暗器と呼ばれる、いわゆる「ナックル」だった。暗器は両手に装備するため防御が出来ない分、身軽に動けるので攻撃の手数が増える。これなら「決戦場」と呼ばれる力試しの場もクリアして、ダンジョンの更に奥へと進めるようになるのでは。そうと決まれば、途中で放棄していた「決戦場へと続く道を拓くための仕掛けの攻略」を再開させよう。ハルはそう思い立つと、まだ押していない四つ目のボタンのある部屋へと向かった。

しかし、思うように行かない。ボタンのある部屋に辿り着く前に、盗賊頭に殺される。何度挑んでも殺される。初心者には神の加護が

あり確実に蘇生出来るとはいえ、死ぬというのはやはり気分のいいものではない。この前レベルが3になった時に盗賊業には重要な運の数値が一つ下がった。こんなにポコポコと死ぬのは、運がないかなのだらうか。そんなことを考えていると、ふとレベルが上がった時に授けられるポイントについて思い出した。新しく技を覚えたり、既に覚えている技を強化するにはこのポイントを消費する必要がある。もう少し高レベルになったら割り振ろうと取ってあったポイントを使って、何とか今抱えている問題をクリア出来はしないだらうか。そう思ってギルドから渡されていた「スキルツリー」なるものを広げて見てみると、既に覚えることが可能な技の一つに「ステルス」というものがあつた。何でも、一定時間姿をくらませた状態になれるらしい。

「何だよ、あるじゃん!!」

ハルは思わずその声を上げると、恥ずかしそうに頬をほのかに赤らめさせた。冒険者たる者、常に注意を払えと姉貴分が口癖のように言っていたのを思い出したのだ。彼はそそくさと「ステルス」を覚えると、スキルツリーを荷物にしまい込んで四つ目のボタンを攻略しに向かったのだつた。

何とか決戦場への道を拓き、その決戦場もクリアしてレベルが4

になった。ダンジョンの更に奥へと進めるようになって、盗賊団の一味の追剥ぎ男に遭遇するようになった。こいつを五人片付けると結構な経験値と金が貰える。虫も奥の方がよく湧いた。おかげでレベル3から4へと上がる時よりも楽に5へと上がることが出来た。レベルが5に上がってすぐのことだった。ダンジョン内をうろろとしてみると特殊な鍵が施されているわけでもなさそうな未開封の宝箱を発見した。…今日こそは、宝箱の罫解除を成功させたい。そう思って宝箱の前にひざまづくと、追剥ぎ男に見つかった。

「宝箱！宝箱に集中させろよ！うつとおしい！！」

目の前の折角のお宝が他の冒険者に持つて行かれるところを想像して苛々としながら追剥ぎ男を殴り倒すと、ハルはいそいそと宝箱の前へと戻った。この前はどんな罫か見定めは出来ていたものの、罫を解除出来たという手ごたえが低く、ままよとばかりに鍵を回してみたら案の定失敗した。その前はどんな罫か見定めている間に罫が作動してしまって失敗した。だから、慎重に、慎重に…。動悸が激しくなり、呼吸が荒くなるのを抑えながら見定めを続けていると、今までに感じた事もないような手ごたえが得られた。

（これなら、いけるか…？）

はやる気持ちを抑えつつ、ゆっくりと宝箱の鍵を回す。カチリという聞いたことのない音が鳴り響き、罫が作動することなく宝箱は開いたのだった。ぱつくりと開かれた宝箱をハルは束の間見つめる

と「開いたー！！」と叫びながら宝箱の中を覗き込んだ。

「うわ！うそ！開いた！罫が作動せずに開いたよ！！なんか、ようやくシーフを名乗れる気がするよ！うっわー！五つも物が入ってる！すっげー！！！」

彼は大はしゃぎしながらいそいそと宝箱の中身を荷物へとしまい込むと、あともう少しでミッション達成となる追剥ぎ男の討伐と虫退治を手早く終わらせ、意気揚々と街へと帰っていった。

ルンルン気分で街へと戻ってきた彼を待っていたのは幸福な気持ちではなく、落胆だった。鑑定の結果、宝箱に入っていたのは例の毒に強い小汚い皮鎧と、壊れた剣と盾、装備品に装着させると体力が微量に増えるという不思議な石、それから毒消しの薬だった。体力増加の不思議な石は試供品でギルドから貰える物の方が質がいいだから正直、売りとはした方が嬉しい気分になれる。まあ、冒険なんてそんなもの。そのうち挑戦できるダンジョンも増えて、もっといいものも手に入るさと肩を落としていた彼は姉貴分からの手紙を読んで更に機嫌が悪くなった。

冒険者には冒険者としてのレベルの他に魂の成長度合いを表した「ソウルランク」というものがある。手紙によると、姉貴分は既にソウルランクが4になったとのことだった。レベルがどんどん引き離されるのはまだいいとして。癪にさわるのは「カイ」だかという仲間の戦士だ。どうやら姉貴分は蘇生に失敗して灰になった際にこの戦士に助けられ、それ以来、彼のことが気になっているらしい。

今までは自分を心配してくれ気遣ってくれる内容だったのだが、今となつては大半がカイがどうしただのこうしただのという内容で埋められた手紙を思わずクシャリと握りつぶすと「だから、カイって誰だよ！」とハルは叫んだ。

一番盗みたかったアメジストを、見知らぬ戦士に奪われかけている。冒険者としての道のりはまだ遠く長い盗賊の目の前に、大きな難問がまた一つ立ち塞がったのだった。

冒険開始から、初めての畏解除成功まで（後書き）

…最近、土鍋ご飯さんが目の前で「カイさんが」「カイさんが」言う度に、本当にイラツと来るようになってきました。ちくしょう、出来ることなら、人狩りしてやりたい…。でも、私は良い子なので、犯罪には手を染めないんだもん！ふーんだ！！はあ、カイさんなんて気にしないで、自分のペースでゆっくりレベル上げようっと…。

小瀬 数値とユニオン（前書き）

もう寝ようと思い、土鍋ご飯さんにPCを明け渡したら、ハル君的には事件と呼べるものが起こりました。なんか、寝付けなくなってしまったので、何となく投稿します。ちなみに、数値関連についてはネタバレを含みますので、まだ最初のダンジョンをクリアしていない人は「回れ右」をお願い致します。

小喃 数値とユニオン

ハルは街に戻ってくると、何とはなしに財布にしまつてあつた冒険者証を眺め、思わず「え!？」と声を上げた。レベル4から5に上がるのは案外楽だったのにも関わらず、5から6に上がるためには現在蓄積されている経験値の倍は稼がないといけないということが冒険者証の指標には表示されていた。

「えー…うそ、あと2200つて、追剥ぎ男で換算したら22回分? ダンジョンうろつろしてたらアツと言う間に貯まるかなあ?」

そのように呟きつつ眉間に皺を寄せながら冒険者証と睨めっこしていると、彼はある数値が変動していることに気がついた。自己の属性を表す表示のところの「秩序」の項目が若干ながら増えていたのである。

属性というのは何かしらの職業に就く際などにも関係する、いわゆる自己の「人柄」のようなもので、三種類に分けられる。「秩序」と「中立」と「混沌」だ。秩序は分かりやすく言うと「真性のイイ人」で、中立は「世の中には白黒だけではなく、灰色というものも存在するということが分かってる」という、まあどちらかというところの人、そして混沌は「良くも悪くも個性的」とでも言うおうか。ちなみにハルの属性は中立で、姉貴分は混沌だ。姉貴分とよく行動を共にしているというリリアというプリーストも姉貴分と同じく混沌属性だと聞いたことがある。姉貴分から聞いた限りの彼女はともおつちよこちよいで、ほぼ全ての罫に引っ掛かり、ドジを踏んだのを可愛い笑顔で誤魔化す割には腹黒いらしい。姉貴分もしつ

かりしているようでかなり抜けているところがあるのを思い出したハルは「混沌属性って、もしかしてドジの別名？」と首を傾げた。

そのようなわけで各々「属性」というものを持ち、それも冒険者レベルと一緒に記載されているのだが、ハルの冒険者証には今まで0と記載されていた「秩序」の欄が10となっていたのだ。そして100だったはずの「中立」も110に増えている。

（俺、何かしたっけなあ…？）

宙に視線を投げながら今までの冒険を思い返してみたハルは、あることを思い出した。ダンジョンの中で二度ほど、ギルド以外の依頼を受けた事があったのだ。そして、その依頼を達成した際に依頼主に質問をされ、何とはなしに返事をしたことがあった。大切にしていた人形を落としてしまったという男の代わりに人形を探してきた時には、その人形が本当に大切にされていて、彼にとっては珠玉の宝石のようなのだろつというのが伝わってきた。だから「その人形、あんたに愛されてるな」と笑って人形を手渡してやった。また、暗闇でペンダントを落としたという男の代わりにペンダントを探してきた時には、「暗闇の方が落ち着くよね？」と聞かれて「日向も暗闇も好きだけど」と答えた。暗闇にはここそこに危険も潜んではいるが、ひっそりとお宝が眠っていることもある。そして陽の下では、姉貴分が愛する農作物が煌めき輝いている。だから暗闇も日向も、本当にどちらも好きだったから、そう答えた。どちらの回答がどのように数値の変動をもたらしたのかは分からなかったが、そのくらいしか変動の理由は思い当たらなかった。まあ別に、このくらいの変動じゃあ何かに影響が出るといふこともないしと思いつながら冒険者証を財布にしまうと、ちょうどまた姉貴分からの郵便が届い

た。今日は小包ではなく、手紙だけだった。

手紙によると、姉貴分はパーティーの仲間と「ユニオン」と呼ばれるものを作ったらしい。パーティーとはまた違う、ギルドの依頼を効率よく攻略するために気の合う仲間が集まった「同盟」のようなものだという。ユニオンを作るにあたって登録料として三万という大金が必要になるそうなのだが、姉貴分はうっかりとんでもない名前で登録を行ってしまい、慌てて登録破棄したということだった。うっかりミスで大金を失いうなだれていると、いつものメンバーがやってきて一緒に資金調達をし直してくれたそうで、なんとか無事にユニオンを立ち上げることが出来たそうだ。ユニオン名は「アザルス」の風」というそう。この大陸を股にかけ、風のようにさすらい、冒険者として名を上げようという彼女達にはぴったりの名前だった。「よかったら、ハルも入る？」と誘ってくれたのは嬉しかったのだが、ユニオンに入るには直接ユニオンのメンバーと面会しなければならぬらしい。姉貴分とは常にすれ違いで手紙でしかやりとりが出来ず、姉貴分の仲間の顔も知らないハルは大いに悩んだ。そんな状態では入るうにも、入れないではないか。どうやって姉貴分と顔を合わせようかと思案しながら手紙を読み進めていた彼は、思わず顔をしかめて手紙をクシャリと握りしめた。そもそも、ユニオンを作ったのは「今日もカイと会えるかと思っただけ、一向に街に顔を出さなくて。ユニオンを作っておけば専用の掲示板も使えるから、『いつなら一緒にダンジョンに行けるよ』っていうやり取りもしやすくなるし」という理由だった。

「だから、カイって、誰なんだよ!!!」

思わずハルはそう叫ぶと、必死に辺りを見回した。どれだ。どれ

がカイってやつだ。この街に身を寄せているのは間違いないから、もしかしたらすぐ近くにいてもしれない。レベル的に十中八九返り討ちになることは間違いないが、それでも一発殴ってやりたい。

見知らぬ戦士を探す事を諦めたハルは不機嫌そうに鼻からフンと強く息を吐くと、姉貴分からの手紙を荒々しく荷物へと突っ込み、便箋を取り出した。そして「ユニオンに勧誘してくれるのはありがたいけど、それなら顔出せ。馬鹿角」とだけ殴り書くと、封筒に彼女がよく利用しているという宿屋の住所を書き、郵便屋に叩きつけるように手渡した。

小瀬 数値とユニオン（後書き）

…というわけで、ユニオンに誘われました。ちなみに、「ユニオン作る！」と言いだした時に土鍋ご飯さんが言っていた「ユニオンを作る理由」ですが、本当に本分の通りのことを言っただけでした。どんだだけ「カイさん」なんだよ。あ、加入するためにも、ネカフエに行くしかないのかしらん…。

小嘶その2 リリアとの遭遇とユニオン加入（前書き）

おかげ様で無事にユニオンに加入出来ました。リリアさんを見付けられて本当によかった。ネカフエる手間が省けました。ありがとう！

小嘶その2 リリアとの遭遇とユニオン加入

たまには露店でも覗いてみるかとハルが街中をぶらついていると、ブリーストのノーム娘が露店を開いていた。聞き覚えのあるユニオン名のネームプレートを付けていたのでもしやと思い声をかけると、彼女が噂の「ドジっ子リリア」だった。いつも姉貴分がお世話になっていきますと声をかけると、向こうもこちらのことを話で聞いていたのか、明るい笑顔で返事を返してくれた。

何とはなしにそのまま彼女の隣に腰を落着かせて世間話をしていたのだが、姉貴分から聞いていたのとは随分と違って、リリアはとても優しく素敵な女性だった。：ただ、時折「ウヒ」などと裏に何かを含んでいるような怪しい笑い方をする不思議な人でもあった。やはり、混沌属性というのはとても個性的のようだ。彼女は本当に優しく、「よかったらレベル上げ、手伝いましょうか？」と言ってくれた。あまりにもレベルが離れ過ぎているので付き合わせしてしまうのも申し訳ないという思いと、もう少し自力で頑張りたいという思いから「気持ちだけで嬉しいよ。気遣い、本当にありがとう」と返した。いつか姉貴分と三人でどこかに冒険に行けたらきつと楽しいだろうと考えていると、彼女がクスクスと笑いながら「やだ、何見てるんです？ 惚れちゃ駄目よ？」と言ってきた。

「惚れないよ！」

「えー」

「えー… って何さ」

「いいえ？」

本当に彼女は面白い人で、もっと仲良くなりたいと思っていたと向こうの方から「友達になろう」と声をかけて来てくれた。ちょうど自分も同じことを言おうとしていただけに、心なしかドキツとした。

彼女はユニオンの方にも誘ってくれ、慣れない手つきで紹介状を作成してくれた。

「はい、これでウチのユニオンのメンバーですよ。ようこそ！」

「あ、ありがとうございます！本当に、いつも姉貴分がお世話になっていきます」

「いえいえー、お世話してますー」

「そこは普通『こちらこそ、お世話になってます』じゃないの？」

笑いながらリリアにそう返すと、彼女はクスクスと笑いだした。

…何だよ、姉貴分から聞いていたのとは全然違って、本当に楽しくていい人じゃないか。そのままつらつらとまた他愛のない会話をし、冒険者がよく陥る「金欠病」から「良い装備を手に入れるには」というような話になった。宝箱さえ開けられたら、レア物も結構手に入るからお財布も暖かくなるのにと頬を膨らめますリリアを眺めていて、ふと、先日の冒険でリリアの宝箱の解錠率がパーフェクトだったという話を聞いていたことを思い出した。

「ちゃんと宝箱、開けられてるじゃん。俺なんて、昨日ようやく初めて解錠に成功した駄目シーフだよ」

「ふふ、神様のご加護ですよー」

胸を張って得意げに笑うリリアは「レベルが上がればそれだけ冒険もし易くなるし、特殊任務を受けたらどう？」とアドバイスをしてくれた。期間限定でしか受けられない特殊な任務は金も経験値もオイシイらしい。彼女は折角開いていた露店を畳むと「こっちへ来て」と言って特殊任務を受注できる場所へと案内してくれた。任務の内容を見てみると、今の自分にはかなり骨が折れそうな内容だった。とりあえず、もう少しレベルを上げてから挑んでみようか。そんなことを考えていると、隣にいたリリアがこちらを見上げて「頑張つてね!」と笑いかけてくれた。見上げられて初めて、彼女がとても小柄だということに気がついた。

「今並んでみて気付いたんだけど、ノームってすごく小柄」

「そうなんですー」

「ハグしたら、ジャストにスッポリ腕の中に収まりそう」

ただ単に「小柄である」ということの感想としてそう言ったのに、彼女は「きゃーセクハラ!」と言いだした。慌てて「え、何で!？」とハルが声を上げると、彼女はクスクスと笑うばかりだった。

「可愛いねって話だよ!？」

「あら」

「何」

「いえ、レベル上げ、頑張ってねー」

笑い続ける彼女が本当に可愛らしくて。不覚にも、思わず「本当にハグしたい」と思ってしまった。正直、姉貴分よりも可愛げがある。どうして姉貴分はこんな素敵な人のことを「腹黒」だと言うのだろう? こっちの気も知らないで「カイさんが」「カイさんが」と言ってくるお前の方がよっぽど鬼畜だよ。

ハルはリリアに別れを告げると、いつもの下水道へと戻っていった。

いつかきつと、姉貴分や彼女と冒険に出たいから。とりあえず今日も追剥ぎ男退治を頑張ろう。

小嘶その2 リリアとの遭遇とユニオン加入（後書き）

ちなみに、彼女との会話文はほとんど原文ママです。ハル君が本文内で彼女に対して思ったことも結構リアル。ほ…本当にハグしたいって思っちゃったんだよね…。だって、モーションとか巧みに使って、本当に可愛らしく笑うんだもん。なんたる、感情移入し過ぎ？これ、ロストしたら立ち直れなくなりそうで怖いわ。

えっと、とりあえず、私は危ない人ではないし、ノーマルだし、ちゃんと三次元に土鍋ご飯さんという伴侶がいるということを念押ししておきますねっ！？

レベル6になるまで（前書き）

次のレベルで成長限界なので、早く下水道をクリアしなきゃです。
頑張るぞー！！

レベル6になるまで

リリアにユニオンへ加入するための手続きをしてもらった後、ハルは彼女達に追い付きたいと意気込んで下水道へと戻っていった。今日は運に恵まれているのか、いつもよりも宝箱に遭遇することが多かった。動悸がするのを抑えつつ罨の見定めを行っている途中で、彼は強い衝撃と視界が白むを感じた。ふと気がつくと彼は静寂の世界に包まれており、足元には自分の死体が転がっていた。…罨の爆弾が見定め途中で爆発したのである。

「え、うつそ！マジかよ！！」

彼は慌てて蘇生の行える女神像へと走った。罨解除に失敗した宝箱とはいえ、中には何かしらが入っている。命を失ってまで開けた宝箱の中身を他のヤツに持って行かれては堪ったものではない。彼は生き返ると、今度は先ほど自分が死んだ場所へと急いで引き返した。

「宝箱！宝箱の中身は！？………よかった！あるよ！！」

ホッと胸を撫で下ろし、急いで中身を荷物へとしまい込むと追剥ぎ男がやってきた。何度か追剥ぎ男と戦っていると、再び宝箱に遭遇した。今度こそ、慎重に、慎重に。そう思いつつハルは見定めを行い、そして絶叫し、走りだした。

「はあ！？マジふざけんな！！また爆発するってどういうことだよ！！！！」

なんと二度目の宝箱も罨解除失敗で、またもや死んでしまったのである。先ほどと同じように急いで生き返って戻り宝箱の中身が無事であることに胸を撫で下ろし、三度目の正直とばかりに挑んだ宝箱も途中で罨が作動し、石つぶてを食らってしまった。…昨日の解除成功はまぐれだったのだろうか？うなだれつつも四度目の宝箱に挑む中、ハルはあることに気付いて見定めのための技を使い分けるタイミングや順序を変えてみた。すると、どうであろう。すんなりと罨解除に成功したのだった。そしてその後も二つ宝箱を開けたのだが、そのどちらも罨解除に成功出来た。

（やっぱり、焦ったら駄目だな。落ち着けば、ちゃんと出来るんじゃない、俺！）

自分の成長に喜びつつ宝箱の中身をしまっていると、脚甲という今まで手にした事のない装備品を得ることが出来た。もしかして、自分の装備出来るものか？そう期待しつつ街に戻り鑑定を依頼してみると、なんと装備可能なものだった。しかも、脚甲装備はギルドから支給されていた初心者用の装備品をいまだに使用していたので、今回手に入れた物の方が防御力が高い。

（は…初めて、自分で「今身に着けている物以上の装備品」を手に入れた…）

ハルは心の中でそう呟くと、目頭が若干熱くなるのを感じたのだ。
った。

再びダンジョンと街との往復を繰り返していると、財布の中の冒険者証が何やら音を立てたような気がした。追剥ぎ男の討伐依頼を達成し終えたということをダンジョン内にいるギルドの職員に報告しに行った際に、再び依頼をこなしに戻る前にふと立ち止まって「さっきの音はなんだったのだろうか？」と冒険者証を取り出してみた。すると、今までの行いの中の何かが一定レベルをクリアしたようである。獲得称号の欄に一つ称号が増えていたようだった。何が増えたのだろうか？と首を捻ってしげしげと冒険者証を眺めていた彼は思わず「え！？」と声を上げた。増えていた称号は「小金持ちの冒険者」だった。その称号は、いつの間にか冒険中に稼いだ銭の累計が一定数値を超えていたということを表していた。赤貧にあえいでいた彼にとって、それは心なしに心躍るものだった。

（どうしよう。貯めておいた金を使つて、装備を新しくしようか。でも、この先レベルが上がってきたら、露店で中古を買うか、ダンジョン内で自力でゲットするかするしかなくなってくるんだもんな。今からあまり、使いたくはねえなあ…）

目を白黒とさせながら思案していた彼は、何かを思いつき「そうだ！」と声を上げた。

「折角だから、宿屋に泊ってみよう！そのくらいの贅沢は許されるよな！！」

ちょうど体力も減っていて幾分か疲れている気もするしということとで、ハルは次に街に戻った際に宿屋へと足を運んだ。姉貴分が口癖のように「いつかロイヤルスイートに泊ってみたい」と言っていたのを思い出して宿泊費用を見ると、なんと3000ゴールドもした。ただ、高費用な分やはり至れり尽くせりのようで、体力・魔力が完全回復する上に、体調がどのくらい優れているかを最高200%という数値で表したものが冒険者証に表示されるのだが、それが160%まで回復できるらしい。そんなに疲労回復の効果があるなら、確かにいつかは泊ってみたいと思いつつ、他の部屋の料金表を見ていたハルはあるものに目ざとく気がついた。料金無料の「馬小屋」の上に、ソウルランク2までの冒険者限定ルームの案内が記載されていたのである。そして、思わず驚きの声を上げてしまったのだった。

「え、これ、間違いじゃなくて？ロイヤルスイートとほとんど同じ効果なのに、100ゴールドで本当にいいんですか！？」

「いいコンディションの方が戦闘も楽になるから、レベル上げも苦じゃなくなるだろう？ギルドとしても新米冒険者には早く若葉マークを卒業してもらいたいんだとさ。お兄さん、100くらいならも

う気軽に払えるくらいにはなってるなら、利用して損はないと思うよ？」

「いやいや、損どころか！泊ります、泊ります！！」

たった100ゴールドさえ払えば体力・魔力が完全回復する上に体調が150%まで回復出来るなら、そりゃ喜んで払います。払わせて頂きますとも。追剥ぎ男のミッションは達成すると250ゴールド貰えるから、そのくらいだったら財布も痛まない。本当にありがたい。ハルは満面の笑みでしばらくぶりの布団に寝転ぶと、久々に泥のように眠ったのだった。

体調がいいと、やはり戦闘中のキレもいい気がした。これなら、レベル6もすぐさまな気がする。ハルは勢い込んで追剥ぎ男を追いかけて回した。そしてレベル6に上がるために必要な経験値を稼ぐと、街に戻って宿に泊った。

目が覚めて、チェックアウトの際に女将さんが「レベルアップおめでとう。次のレベルまではあとこのくらいですよ」と教えてくれた。そして、レベルが上がったことによってどのように数値が変動したかを確かめるために、動悸がするのを抑えつつ冒険者証を取り出した彼は「はあ！？」と怒りにまかせて絶叫し、目の前の女将を驚かせた。

「なんで、また運が下がるんだよ！運のないシーフって、どんなだよ！！」

「お兄さん、きっと次は良いことがあるから、気にしなさんな」

「いや、良いことって！運が下がったのに！？」

まあ、冒険なんて、そんなもの。ハルは諦めのため息を吐くと、女将に「また来ます」と挨拶して宿屋を後にしたのだった。

レベル6になるまで（後書き）

…… 2回爆弾で死んだ時と、SR2までの冒険者限定部屋の効果を見た際と、そしてLUKがまた1下がった時はリアルに叫びました…。

小嘶その3 カイとのプチ遭遇（前書き）

レベル6になるちょっと前に、とうとうカイさんとチャット上で
すが遭遇致しました。

後の方で、結局カイさんと顔を合わせたかのようなシーンが出てき
ますが、その時には既に私はPCを土鍋ご飯さんに引き渡していた
ので、私とカイさんとの遭遇は本当に前半のチャットで会話したの
みです。

いつか、お会いした（キャラクターを並ばせた）状態でお話してみ
たいです。

とりあえず、チャットについては専用の通信機器があつて、インカ
ムを付けてやり取りしているというような扱いとさせていただきます
せ。

この世界に機械があるかどうかは分からないがな…！

小嘶その3 カイとのプチ遭遇

もう少しでレベル6になると勢い込みハルが街と下水道を往復している、ユニオン専用の通信機器が音を立てた。誰が話しているのだろうと通信機を耳に装着しながら道具屋や鍛冶屋の前をうろろろとしていると、男の声で「こんばんはー」と聞こえてきた。別の男が「あ、カイさん、初めまして」と挨拶しているのが聞こえ、ハルも思わず「初めまして。よろしくお願いします」と礼儀正しく挨拶をした。こいつが例の戦士か？ などという思いよりも先に「あ、ちゃんと挨拶しなきゃ！」ということのほうに真っ先に脳裏をよぎった結果だった。カイともう一人のユニオン員、そしてリリアが盛り上がっているのに耳を傾けていると、カイが「ハルさんは？」と尋ねてきた。彼らが先ほどまで「ここに行こうよ」と盛り上がっていたダンジョンは自分のレベルではもちろん行くことが出来ない。ハルは折角誘ってくれたのに申し訳ないと思いつつ「まだ、下水から出れないんです」と口を開いた。

「え、ソロでやってるの？」

「はい。冒険に慣れたいので、自分のペースでゆったりまったりと」

「ハルさんとも、一緒に行きたかったなあ」

「ありがとうございます。下水をクリアしたら、是非ご一緒させて下さい」

「はい」

顔を合わせての会話ではなかったが、カイがとても良い人そうであるということを感じることは出来た。少し釈然としない部分もあるが、あの馬鹿角が吊り橋効果というだけで気になっているというわけでもなさそうだというのが分かり、心なしかホッとした。

再びユニオン員達の会話に耳を傾けていると、リリアとカイが連れだって結構なレベルのダンジョンに行こうかという話をしていた。今日はたまたま姉貴分がすぐ近くにいたハルが「だったら、姉貴分を呼んで来ましょうか？」と彼らに声をかけると、急にカイが「だまされたー！ー！」と叫び出した。あまりの声の大きさに、顔をしかめて耳に着けていた機械を離しつつ「騙された？」とハルが返すと、カイは「あ、ごめん、こつちの話」と慌てた声を出した。：なんか、この人も結構面白可笑しいな。あの馬鹿角に、実はぴつたりなんじゃないか？そう思いつつ「じゃあ、あいつをそちらに行かせますから」と返事を返し、通信機未装着でまったりとしていた姉貴分に「カイさん達が呼んでるよ」と声をかけた。

姉貴分にくつついて、彼らの待ち合わせの場所へとやってくると、リリアが素手でパンチを中空に繰り出していた。姉貴分はいつも攻撃の際に「はい！」という少々間抜けな声を出しながら斧を振るう。それはもう「お前、斧じゃなくて、もう愛用のクワで戦えば？」と言いたくなるような感じなのだが。それとは対照的に、リリアはとても可愛らしい鈴の音のような声でパンチを繰り出していた。どう

して同じノームなのにここまで差があるのだろうか。あまりの可愛らしさに思わず「リリアさん、可愛い」と呟くと、隣にいた姉貴分が顔をニヤつかせた。

「ねえ、リリア。今、ハルがね、リリアのこと可愛いつてニヤニ…」

「ニヤニヤはしてねえだろ!？」

慌てて姉貴分を小突いて口止めすると、姉貴分は「なんで私がはたかれなきゃいけないのよ…」と頬を膨らませた。そのやり取りを聞いていたカイが「また嫉妬を生む発言を…」を苦笑していたのだが、誰が誰に嫉妬するのだろうか?とハルは首を傾げさせた。それを見ていたリリアがクスクスと笑った。

彼らは本当に面白くて良い人達だ。一緒にいて、こんなにも楽しい気分になれるとは。彼らに出会えてよかったと思う。そして早く、そんな彼らと一緒にダンジョンに潜れるようになりたい。ダンジョンへと向かっていく彼らの背中を見送ると、ハルも思いを新たに下水へと戻って行ったのだった。

小嘶その3 カイとのプチ遭遇（後書き）

どうやらカイさんは私が「私をログアウトさせて、姉貴分へと変わりますか？」と声かけをした際に、ハル君の中の人が私ではなく土鍋ご飯さんと勘違いした模様です。

あと、姉貴分が彼らと合流した際にハル君もそこにいたような感じで書きましたが、前書きにも記載しました通り、実際にはおりません。自宅からのインだったため。ただ、チャット上と、隣にいた土鍋ご飯さんとのリアルな会話にて本当にこんな感じの内容の会話してました。そして、土鍋を殴りつけたのも事実です。わざわざ報告するなよ、恥ずかしい。

でも、同じ種族なのに何パターンか声があるんですねえ。知らなかった。キャラクターエディットの時に声まではたしか聞けなかったはずなので、ソロでやってると気付かないですよ、これ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943y/>

冒険者かく語りき ～トレジャーハンター修行中～

2011年11月29日02時48分発行